

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名：古田 耕史

論文「ジャコモ・レオパルディ研究——自然観と「無限」の詩学」は、ロマン主義期イタリアを代表する詩人のひとりレオパルディ（1798年生-1837年歿）の思想、詩作の実践、および両者の関連を読み解こうとした、2部構成（331頁）の意欲的な試みである。第1部ではレオパルディの自然観およびそれと密接に結びついた詩論の生成を跡づけている。スタール夫人（および彼女の著作に見られるドイツ思想の潮流）に大いに共鳴する形でレオパルディは有機的な自然観を形成する（第2章）が、この自然は宇宙全体の最良の調和を目指す一方で、個人の幸福にはまったく配慮しない負の側面を持つ。この自然の両面性がレオパルディの思想には最後まで残り続けること（第3章）を指摘しつつ、自然との幸せな共生関係を失ってしまった時代の個人に唯一可能な詩を、レオパルディが「情感」的な詩だと見なし（第1章）、その「情感」は「内なる自然」に発するものだと考えるに至ったこと（第4章）を、古田論文は詳細かつ実証的に示し、自然観・詩論の変遷と詩作からの神話的要素の消失が年代的に連関していることを説得的に論じている。第2部は、自然から不幸を運命づけられた個人がいかに生の重み・苦しみに耐えられるのか、この問いに対する回答をレオパルディの詩作の中に探っている。レオパルディは自分が存在しているという意識を忘れさせてくれる脱自体験＝境界消失の体験に救いを求めるが、それを古田論文は「無限の詩学」と命名し、レオパルディによる「無限」探求が《無限》（第1章）、《シルヴィアに》（第2章）、《嵐の後の静けさ》および《村の土曜日》（第3章）などの代表的な詩において、いかなる変奏と表現技巧、音声的効果をもって扱われているかを、精緻に分析している。「無限」探求と愛や死などのテーマとの関連や、レオパルディにとっての詩作の意味を考察することにあてられた部分（第4章および結論）も十分に明晰かつ的確である。

ただし、レオパルディによって利用されたと思しき材源（とくにイタリアの先行詩人）に関しては一層の博捜が必要であろう。また、スタール夫人の影響に関する指摘はもっともであるが、レオパルディの思想を生みだした知的背景についても、さらに踏み込んだ解明が望まれる。加えて、若干の訳文については改善の余地がある。しかし、上に述べた古田論文の諸長所は大きく評価できる。また、古田論文が広く先行研究文献を視野に含めつつ、レオパルディの思想と詩の核心を鋭く捉えた、という貢献は大きい。論文「ジャコモ・レオパルディ研究——自然観と「無限」の詩学」を起点とした、古田氏の研究の今後のさらなる発展にも大いに期待が寄せられる。

よって、審査委員会は古田論文が博士（文学）の学位に十分値するとの結論に達した。